

# 予定調和には進まない

校長 山田浩之

文化の日の午前、上古町に出かけました。商店街が開催するイベントの中に新潟小学校の六年生が考え、準備した楽しいプロジェクトが実施されると聞いていたので見に行つたのです。最初に「門前市チャレンジゲーム」に挑戦しました。

ストップウォッチの表示を見ずに、一秒三匹ったりに止めることができれば景品がもらえるというルールです。結果は、一〇秒七と、まあまあの成績でした（でも、なぜ一一秒三？）。次に「上古町ファッショントバトル」に参加しました。

その日のコーディネーターを撮影して、後ほど審査があるということです。ボーズを作つて写真に撮つてもらいました（だったら、もっと、服装を考えてくればよかった）。

全部で一三のプロジェクトが、行われました。それぞれのプロジェクトは、商店街のところどころに同居させてもらっています。商店街には、子どもたちの呼び込みの声が響いていました。

これは、六年生の総合的な学習の一つの場面です。このイベントに参加した子どももいますし、別の方で、上古町に関わっている子どももいます。それぞれに取り組んでいることは違いますが、上古町のさらなる活性化のために活動をしています。

この総合的な学習を進めている職員は、当初、次のように構想しました。「商店や商店街にとつてプラスになることと、子どもたちにとつての学びや楽しいことを両立したい。」

現在、子どもたちは様々なことを実行して、それぞれに楽しい時間と充実感を得ることができます。しかし、時には、自分の企画が、商店（街）に受け入れられずに、考え直すということもあります。商店（街）の思いを受けて、それに応えようと話し合う姿もあります。いつもの学校での授業のように予定調和のうちに進む学びとは、様相がかなり違います。

イベント後に商店街の関係者からお話を伺う機会がありました。

「これまでの学校からの依頼だと、学校から、こういう活動をしたいと言われることが多いのだけれど、今回は、子どもがやりたい、こうしたいということをやることができました」

「結構大変なことも、機会を与えて伴走すればできるものですね」

「子どもがいるだけで町がにぎわい、景観がよくなつたという声をいただきました」

「子どもたちが町に何度も来てくれて、色々な意味での関係人口が増えてよかつたと思います」

これから学校に求められるキーワードに「好き」を育み「得意」を伸ばす」と「当事者意識を持つて、自分の意見を形成し、対話と合意ができる」（中教審・教育課程企画特別部会・論点整理）があります。六年生の姿を見て、その兆しを感じることができました。